「宗教」の未来には大きな希望をもてないと感じている人も、「宗教的なもの」や「アニミズム」にはいくばくかの希望を託すかもしれない。逆にそうしたアニミズム言説の背後にある宗教離れの現実こそ問題だと考える人もいる。「気」をめぐる東アジアの宗教思想の伝統にエコロジー的な世界観の可能性を求めようとする人もいれば、「気」の流行に無気味なものを感じる人もいるだろう。

しかし、このように「宗教ではない宗教的なもの」に希望を託す人々が増大している事実は、日本や東アジアだけに見られるのではない。広く世界の先進国では、「宗教」にかわる「霊性」を求める潮流が台頭している。健康とは何かを定義しようと思えば、からだや心だけでなく、「霊性」的な次元をも考慮に入れなければならないと考えられるようになった。医療の専門家もそのことを認めざるをえない現状である。現代宗教について深く考えようとすれば、このような広い意味での宗教をも視野に収めていかなければならない。そのようにして、「宗教」とは何かをも改めて考え直していかなければならない時代に、私たちは居合わせている。

ここまで述べてきたのは、本誌『現代宗教』が二一世紀の幕開けに際して、問いかけようとしている問いのほんの一部である。私たちは日本の宗教の現実から目を離さないようにしたい。日本人の宗教生活のあり方に即して、現代社会を悩ませているさまざまな問いに向き合いたいと思う。哲学や思想や理論だけでなく、政治、経済、教育、科学技術、芸術等、人類の営みの多くの領域の中の宗教的なものに目を向けることで、何が見えてくるか問おうとする。

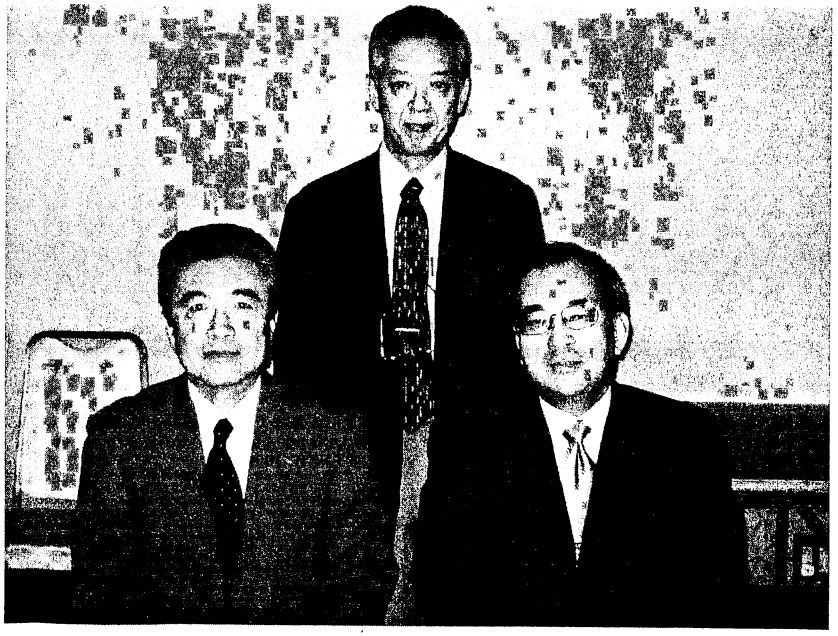
それと同時に、本誌は広く世界の宗教にも目を配っていきたい。世界の諸地域の関係がますます密になっていることは、私たちの日々の実感である。今やムスリム（イスラム教徒）の現実、ユダヤ教徒（ユダヤ人）の現実、ヒンドゥー教徒（インド人）の現実に無関心でいることは難しい。現代とはまた、白人の富裕層がシャーマニズムの実践に熱心に取り組む時代でもある。そして、ユング派を初めとする心理療法が宗教運動のように、人々の癒しや救いの欲求を汲み上げる時代でもある。これらも私たちの関心を大いにそそる話題である。

『現代宗教』は年に一回の刊行物として出発する。取り組みたい論題、提供したい情報はまことに多い。しかし、足取りは着実なものでありたい。日本の市民の間に、とりわけ宗教に関わりが深い、また宗教に種々の関心をもつ読者の間に、宗教についての適切な情報を提供すること、そしてさらに宗教についてよりよく理解し、考える姿勢が育つための手がかりを提供すること――この目標を見失うことなく、一歩一歩、ゆっくり歩んでいこう。

対談

宗教復興と一神教

山内昌之（やまうち まさゆき）
〈司会〉島薗 進（しまぞの すすむ）
森 孝一（もり こういち）



司会　日本では「宗教離れ」として、宗教は終わったと思っている人も一方で多く、またヨーロッパでもそのような雰囲気があります。しかし世界全体を見ると、むしろ宗教復興と言っていいような、人心が宗教に向かっていると評価できるところもあるのではないでしょうか。それを代表するのは中東・アジアのイスラームであり、インドのヒンドゥー・ナショナリズムなのかもしれません。またアメリカにはブッシュ政権を支えるようなキリスト教保守派の台頭が見られます。さらに、アメリカが仏教やイスラームなどの影響を受け、既にユダヤ・キリスト教国家という枠を越えているのではないかとも言われています。

このようなことを日本から理解するのは、なかなか難しいところもあります。日本人が自分を振り返りながら、世界の宗教復興を理解する手がかりが得られればということで、世界の政治・宗教に広く目を配られながら、イスラームとキリスト教の伝統に深く接してこられた山内先生と森先生とにお話をいただきたいと考えております。主題を「宗教復興と一神教」といたしまして、日本人が最も理解しにくい一神教の世界ということを一方の頭に置きながら、宗教復興と言えるものがあるかどうかに力点を置きつつお話をいただきたいと思っております。

まず山内先生から、日本人から見て最も理解しにくいとともに、脅威を感じていると思われるイスラム教に関してお話をお伺いいたします。日本から見ると、世界中でイスラーム勢力が力を伸ばしているのではないか、しかもそれが何か危険な方向へ向かっているのではないかと感じられるようにも思われますが、いかがでしょうか。

■イスラーム理解における多様性の欠如

山内　今日はかなり大きなテーマを扱うことになります。森さん・島薗さんのおふた方はどちらかといえば、宗教学的なディシプリンをもとに事象をお考えになるお立場ですが、私は歴史学から入り現代政治現象の分析を比較や相関という観点から、中央アジアと中東という地域の政治現象としてのイスラームを理解するという方法を取っております。

イスラームにかかわる現象は現代の政治・社会・経済の多面的な側面に大きなインパクトを与えていることは間違いありません。そして、この問題を理解する際のアプローチに関して、日本ではいくつか個性的な特徴があるのではないかと思います。

第一の特徴として、イスラームは本質的には宗教ですから、宗教現象もしくは宗教運動として現れる現代イスラームの特質をどう考えるかといった場合に、根本となるアプローチや重要な手掛かりは、やはり日本では宗教学というアプローチになります。だからこそ、このような『現代宗教』という企画においてイスラームへの関心をお持ちになるのだと思います。ところが、宗教学という学問的アプローチが現代イスラーム研究の場合にどのように試みられるかについては、中村廣治郎さんのような考え方を深めるような人がそれほど出ていないと思います。ディシプリンとしての宗教学的なアプローチで現代イスラームやその周辺からテロリズムが生み出される要因をどうとらえるのか、この点の認識が実は日本の研究者には乏しいと思います。

第二の特徴として、「イスラームについて日本あるいは日本人は何も知らないから知る必要がある」という言説があります。これは一見すると誰にも異存ない言説かもしれません。しかし、イスラームを知ることや学ぶことは、各自なりの解釈をするということにつながります。クルアーンそのものがテキストである以上、テキストの解釈についてイスラームの中でも様々な解釈がありえますし、現実に法学には四大学派もあるわけです。その中で、イスラームとは何かという問いがなされる場合に、「これがイスラームだ」という解は一義的にはありえないのですね。したがって、イスラームを内在的に理解することが必要な場合、イスラームの教理内容はひとつの立場や方法でしか理解できないのかという根源的な問題が実は起こるはずです。このことは、最初に述べた学問としての宗教学的アプローチがしっかりしていれば、解釈はひとつであるはずもなく人びとの理解に多様性を認めることができるはずです。しかし実際には、あたかもイスラームの理解や解釈が一義的に出てくる「説教」じみたスタイルが前提とされがちになっている。しかも、イスラームを信じている人たちのイスラーム解釈なるも